

幼い頃の思い出

僕は結翔^{ゆいと}、兄は伊織^{いおり}という。僕と兄は三つ離れている。兄弟は二人だけで仲は良い方だ、と思っている。なんといっても僕と伊織は切っても切れない仲なのだから。男ばかりの兄弟で、姉や妹が欲しいと思ったこともあるが、今は男だけで良かったと思っている。それは二人だけの世界が出来上がっているからだ。

僕と兄の間にはいろんな思い出がある。兄は僕のことを本当に可愛いらしくて、小さい頃から、よく遊んでくれた。ゲームをやったり、ビデオを見たり、近所の空き地で遊んだり、毎日のように僕に構ってくれたのだ。

僕もそんな兄が大好きで、いつも一緒にくっついていた。その方が楽しくて、安心できたからだ。近所に兄の同級生が何人かいて、よく一緒に遊んでもらった。年上のお兄さんたちに僕も混じって遊んでもらっていたのだ。同い年の友達よりも、お兄ちゃんたちと遊ぶほうが好きだったのだ。

毎日のように外が暗くなるまで遊んでは母に叱られていた。「いつまで遊んでるの！」と言われてはしょげていたが、次の日にはまた遅くまで遊んでいた。遊んでいると楽しくて、ついつい時間を忘れてしまうのだ。時計を持っているわけではないし、帰りたくないという気持ちも、もちろんあった。

そんな僕たちに両親は「勉強しろ、勉強しろ」としきりに言ってきた。たまには勉強しようと思って机に向かうのだが、ほとんど頭に入らず、気がつけば漫画を読んでいた、ノートに絵を描いて遊んでいた。そんな風なので学校の成績は良くない。僕も伊織も勉強は好きじゃなかった。

特に兄は中学校に入ると、高校受験を見据えて、より親もうるさくなってきた。僕はまだ小学校だったので、あまり危機感はなかったが、兄は可哀そうなくらいに母に「勉強しなさい」と言われていた。

兄もそれは分かっている自分の部屋で勉強するのだが、そんなときに僕は退屈で、兄に遊んで欲しくて、勉強の邪魔になっても部屋に入って行って、ちょっかいをかけるのだ。「今はダメだ」と言われても、傍でゲームをしたり、兄のベッドに寝転んだりして、とにかく傍にいたいと思っていた。一人で部屋にいてもつまらなかったのだ。

そんなとき、兄の異変に気づいたのは、彼が中学一年生のときだった。僕が四年生のときだ。いつも僕の方が先に帰宅して、兄の帰りを待っているのだが、そんなとき僕は兄の部屋でエッチな本を見つけてしまったのだ。彼はそれを卒業アルバムのカバーケースの中に、無理やり突っ込むようにして隠してあった。

僕はなんだろうと思って、それを取り出して見つけてしまったのだ。すると裸の女の人の

写真がいっぱい出てきた。スタイルがよく、おっぱいも綺麗で、つい夢中になり、僕はその本を見入ってしまったが、同時に僕は少なからずショックを受けた。兄がこんな本を見ていたなんて。まだ十歳の僕が受けるには、あまりにも衝撃すぎた。でもそれが、いい意味での衝撃で、僕もその世界に惹かれてしまったのだ。

それを見つけてからは、ときどき兄の部屋に入っては、その本を見ていた。同じ画像ばかりだったが、当時の僕はそれでも満足だった。そしてあそこを大きくしていたのだ。兄のエロ本はその一冊だけだった。

もしかしたら兄よりも僕の方が、それにのめり込んでいたのかもしれない。中学生にもなれば性的なことにも目覚めるだろう。僕だって、学校の友達とエッチな本を見たことがある。ただ自分で買ったりはしなかった。お金がなかったし、それを自分の部屋に置いておく勇気もなかった。

僕でさえも小学生でエッチなことに興味があったのだから、たぶん兄だって、目覚めていたと思うのだ。ただ弟の僕には何も言わなかったが。

そういえば兄はあるとき、自分の部屋で素っ裸になっていたことがあった。あれは兄が小学校の六年生の時だったと思う。一糸まとわぬ姿で、ベッドに寝ていたのだ。

そのとき僕が急に部屋に入ってしまったものだから、兄は少し慌てていた。なんだか見てはいけないものを見てしまったようだった。僕も少し焦っていた。

「なにしてるの？」

と僕は怖い気持ちで聞いてしまった。そしたら兄はこう言ったのだ。

「隣の屋根から水が落ちてきて、全身ずぶ濡れになった」と。

ウチの隣の家は隣接していて、手が届きそうなところに屋根があるのだ。その屋根から水が流れてきたというのだ。僕はその言葉を鵜呑みにしていた。でも今考えると、それは嘘だと解かる。兄がなぜ咄嗟にそんな嘘をついたのか、なんとなく解かる気がする。まさか全裸になってオナニーしていたとは言えなかったのだ。それにその頃の僕はまだオナニーなんて知らなかった。

今思えば、あの頃から兄には、そういう気配があった。いや、健康な男子なら性的なことに興味を持つのは正常かもしれない。きっと兄は僕がいないときにオナニーをしていたと思う。

だが、おかしいことはそれだけではなかった。全裸の兄を見つけたときに、彼は言ったのだ。

「ユイト、俺のち○ぽ握ってみろ」

そう言って兄は腰を少し前に出した。僕は言われるままにそれを握っていた。兄のそれは大きく勃起していて固くなっていたのだ。なぜ兄がそんなことを僕にさせるのか、疑問に思わないままに僕はそれを握っていたのだ。

そしてそのことは母には黙っていた。兄に口止めされたわけではないが、言うてはいけないことだと本能で判っていた。

